様式1

令和６年度　学校評価表

学校教育目標	心豊かにたくましく　共に学び伸びる「けやきっ子」の育成

a　ミッション	・地域の教育力を生かした御調プライドを醸成する教育の推進	a　ビジョン	○進んで学習し、きまりを守って秩序ある学校 ○すべての児童が生き生きと活動する学校 ○思いやりと感謝の心を持ち、進んで奉仕する姿があふれる学校 ○教職員が育ち、その実践によって児童や保護者・地域の方々に信頼される学校

尾道市立
御調中央
小学校

評価計画							自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	担当者	f 目標値	7月 g 達成値	1月 g 達成値	h 度達成	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	ロ	ハ	l コメント	m 改善案
確かな学力の育成	未来につながる基礎的な学力の育成	知識・技能を活用する力の育成	○基礎・基本の確実な定着 ・ドリルタイムの読書や家庭学習での漢字・計算の復習 ・月に２回学力補充の時間を設定し、単元末テストで点数の低かった問題を重点的に指導	○国語・算数の学期末テスト（知技・思判）の学年目標値を超えた児童の割合 １～３年生　８割 ４～６年生　７割	教務・研究部	75	国語 70.7 算数 68.0	国語 72.9 算数 70.5	95.6	B	国語・算数の学期末テスト「たしかめよう」（知技・思判）の学年目標値を超えた児童の割合は、国語が72.9%、算数が70.5%で、前回よりも2%上昇したが目標値である75%には及ばなかった。国語科では、漢字や言葉の意味理解などの言語に関わる問題や、文章内容を正しく読み取り書き抜く問題の正答率が低かった。算数科では、図や表と式を関係付けて考えることや、応用問題で既習の知識と結び付けて考えることに課題があることが明らかになった。 来年度に向けて引き続き、朝のドリルタイムの読書や漢字・計算の復習を行いながら、学力の土台となる基礎・基本の力を高めていく。また、問題の大切なところに線を引きながら解く指導を継続することで、問題を正しく把握し、解き方の見通しがもてるようにしていく。	9	1	0	・どの項目においても努力や良くしていこうという気持ち、取組、活動が伝わってくる。 ・目標値に少し近づいたことは取組の成果だと思う。児童の実態から授業改善に取り組むことも必要だと思う。読み取る力、書く力は、学力の基礎なので、今後も課題として取り組んでほしい。 ・目標値に達していないのが残念。学期末テストのみの評価では、正確さとしてはどうかと思う。単元末やミニテストはどうか気になる。 ・学年によって学習規律が徹底できていなかったり、つなぎ発言や問い直しがなかったりする授業があった。学校としてベクトルを揃えた授業改善及び反復練習を徹底し、学力向上につなげていってほしい。 ・朝の時間の有効活用はよいと思う。いろいろな表現に出会える読書はいいと思う。児童、もしくは先生方の「わたしのオススメの一冊」など。	・朝のドリルタイムに簡単な小テストや漢字プリントなど、学級実態に合わせた学力補充もできるようにする。 ・家庭学習や授業の提出物など、やらせきる指導をどの学級でも徹底し、家庭との連携も引き続き行う。 ・年々、学習環境が整ってきているので、引き続き丁寧に教材研究を行い、授業改善に努める。 ・前年度の学習内容にもつまずきが見られる児童や、学習の定着に時間がかかる児童も多いため、例えば算数科の習熟度学習や学習支援ができるように時間割や専科の割り振りなど学校体制の工夫を考える。
		論理的に考え、表現する力の育成	○道徳科において児童が自分事として考えようとする指導の充実 ・自分事として考え、自分の考えを深めることができる発問や授業構成の工夫	○道徳科において自分事として考えようとする児童の割合		80	（児童）96 （教師の見取り）58	（児童）96 （教師の見取り）84	112	A	自分事として考えようとする児童の割合は96%で、教師の見取りは84%であった。振り返りに記述する際に、「教材を通して学んだこと」と「これからの生活で生かすこと」の２点でまとめるように意識して指導していったことで、ある程度の成果が見られた。また、役割演技や発言、発表等、多様な表現方法で見取りを行ったことで、児童が自分の思いを意欲的に表現できるようになった。 しかし、個人差があり、依然として道徳の時間に学習したことが日常生活に結び付いていない場面が見られることがある。来年度に向けて、カリキュラムマネジメントを活用し、道徳の時間だけではなく、学校のあらゆる教育活動を通して日常生活に結び付けていけるよう取り組んでいく。	9	1	0	・家庭環境や地域が大きく影響することもあると思う。自分の思いを表現できるようになり、相手のことも考えて発表できることも大切だと思う。 ・自分事として考えるという非常に難しい評価達成なので、正確さという点で判断がしにくい。 ・道徳ノートの使い方が学年によって違っており、疑問に思った。次年度も道徳を研究していくなら自作教材を作ってほしい。 ・身近な話題、タイムリーなテーマを題材にすると関心が高まるかもしれない。	・自分事として考えるという観点に関しては、道徳的価値の深まりが見られるかどうかで見取りを行うようにする。 ・今年度は12月に道徳ノートの使い方についての研修を行ったが、次年度は１学期から定期的にノートの交流を行うようにする。 ・道徳の内容項目に基づいて行事後の振り返りを行い、道徳科と学校行事等とのつながりを持つことができるようにする。
豊かな心と体の育成	人とのつながり、関わりを大切にし、健康的に生きていく力の育成	やり抜く力の育成	○基本的生活習慣の育成 ・挨拶の徹底 ①レベル３の挨拶 ②授業で挨拶 ○自己有用感の育成	・挨拶ができた児童の割合 ・職員アンケートによる挨拶ができた児童の割合 ・自分は人の役に立っていると感じている児童の割合 （居心地点検での児童アンケートと職員アンケート）	生徒指導部	100 85	８５ ８６	91 95	91 112	B A	レベル3以上の挨拶ができた児童の割合は99%で、教師の評価は83%であった。挨拶はほぼ全ての児童に定着してきていると言えるが、自分から挨拶ができにくい児童が一定数いることが課題である。授業での挨拶についての教師評価は９０%で、繰り返し声かけをおこなうことで定着している。 人の役に立っていると感じている児童の割合は、95%で、教師評価は９２%であった。特別活動や道徳科での取組、教師からの声かけ等の工夫や友達とよい関わり方ができているからだと考える。 挨拶については、挨拶名人を手本にするなど、児童主体の取組を実践することで、意識を高めるなどの工夫が必要である。	9	0	2	・登下校や学校での児童の様子を見ると、楽しく過ごしているように思う。関わりを大切にして学校生活を送らせてほしい。 ・繰り返しの声掛けで達成できる児童も増えていて、定着度があがってきているのがわかった。 ・学校に行ったとき、挨拶ができる児童が増えてきたと感じている。自己有用感については、一人の児童に対し、まわりの友達や先生からその子のいいところを次々と挙げていく取組をしていくのも必要だと感じている。 ・挨拶は社会に出ても有効な評価アップの方法なので「自分から」の意識づけをお願いする。 ・児童が主体となる取組として、あいさつ名人の取組がいいと思う。	・挨拶が児童主体の取組となるよう、あいさつ名人や児童会を中心に活動を考えていく。 ・児童の自己有用感を高めるために、帰りの会や振り返りで友達からよさを伝えてもらう取組を行う。 ・行事等の振り返りで、他学年や、がんばっていた人についても振り返り、学校全体でよさを伝え合う活動を行う。
			○基礎体力の向上 ・体育的な行事、体育科の授業、休憩時間等の運動機会の充実 体育カードの活用（めあて、自己目標、ふりかえり）、体育朝会、児童集会（体育的な内容）の実施	・体育の知識技能で評価B以上の児童の割合 ・自分の決めた目標に取り組み達成できた児童の割合 ・友達と関わり合いながら取り組むことができた児童の割合（児童アンケート）	保健体育部	80 90 90	96 92 94	89 88 86	111 98 96	A B B	２学期の体育の学習に関するアンケートをとったところ、「自分の決めた目標に向かって活動に取り組むことができた」児童の割合は、１学期と比較すると３%減少し、「友達と関わり合いながら取り組むことができた」児童の割合も９%減少し、目標まで至らなかった。教師による体育の知識技能の評価で B以上の児童も８９%と下がったものの目標値は達成した。児童らに友達と関わり合いながら学習する習慣が身に付いてきているものの、特定の児童は否定的な回答が多く、特に学年が上がるに伴ってその傾向が強くなっている。 体育に対する苦手意識や個に応じた場の設定など指導を工夫することで、「楽しく」体育の授業に取り組めるようこれからも授業を改善していく。	#	0	3	・学校の取組により、外で遊ぶ児童が増えたように感じます。 ・体育カードの活用がどの程度効果があったのかどうか。また、どのような活用が「楽しく」取り組めるのか今後の改善に期待したい。 ・基礎体力の向上については、運動量を増やすことと様々な動きを取り入れた運動をすることが必要だと考える。 ・保健福祉センターの方が若いころの運動が年をとってからの貯金になるという言葉が個人的に印象に残っているので「健康寿命」を伝えてほしい。 ・体育が苦手と思っている児童が意欲的に取り組めるような目標の設定や「楽しい」を感じる授業を今後も検討していってもらいたい。	・今年度体育カードを使用したことで、児童の「主体的に」「関わり合いながら」という面で効果が見られたので、来年度も引き続き体育カードを使用していきたい。その際に、単元毎に活動の前後での成長が見とれるように振り返りをできるよう改善していく。 ・体育の学習や行事等で、運動量をしっかりと確保できるように研修をしながら授業改善を引き続き行っていくとともに、体育カードの活用の仕方についても共有できるよう研修を進めたい。 ・今年度体育朝会は２・３学期に行った。来年度も毎学期実施できるようにしたい。体育朝会では、体を動かすことだけでなく運動を楽しむことを目的として行いたい。（１学期→簡単な体力づくり運動や運動会関係・２学期→体ほぐし運動・３学期→なわとび）
地域と共に歩む学校	ふるさと御調に愛着をもち、未来の担い手となる児童の育成	地域のよさを実感する力の育成	○ふるさと御調に愛着をもつ児童の育成 ・地域理解や地域への愛情を育む教育活動の充実 ①地域のよさを実感させる地域学習の実施 ②ゲストティーチャーを活用した授業つくり（地域貢献活動等）	地域と関わる学習後の振り返りで、学習を通して学んだ「御調のよさ」や「新たな発見」「自分の生き方とのつながり」を具体的に書くことができる児童の割合	教務・研究部	90	75	92	102	A	どの学年も前回の数値と同じ、または向上した結果となった。 前回数値が低かった低学年では、活動を振り返る際、活動時の写真を見ながら全体で学びや気付きを交流することで、学びを表現できる児童が増えた。また複数の教科を横断して地域学習をしたり、繰り返し地域教材を扱ったりすることで、児童の気付きが増え、学びが徐々に深まっていった。 中・高学年では、道徳参観日や総合的な学習の時間で、地域の方々から直接話を聞いたり、地域の文化を実体験したりすることで、地域の方々の思いを知り、地域への理解や愛情、自分達が地域のためにできることをしていきたいという思いを持つ児童が増えた。体験することが児童にとって大きな学びにつながった。 今後に向けて、今年度の成果と課題を来年度につなげるため、本年度の活動を整理し、来年度の学習活動に反映させ、引き継ぐ。	9	1	0	・教職員の個の力を信じ、組織としての力（組織力）を更に期待する。その為には、地域の人材・教材の活用、地域の団体との連携を上手にしてほしい。５つの地域性、保護者の子供や学校に対する思いの違いがある中、その難しさなどへの対応は大変であろうと推察する。 ・地域との関わりの中で生活しているという思いが育つことを望んでいる。 ・今年行った地域教材を見直して、学びが深まる学習を更に継続してほしい。 ・少しずつ地域とつながる活動が増えてきたと思う。来年度に向けてシラバスを見直す際、地域人材や見学場所をシラバスの中に明記してほしい。 ・地域とのつながりが深められてきているように感じる。今後も地域を活用した学習の取組を増やしてほしい。	本年度、各学年が行った地域学習について、時期、教科、単元名（学習内容）、指導内容、交流場所、そして指導に当たってくださったゲストティーチャーを地域学習一覧表として整理してまとめた。またシラバスを作成する際、他教科や道徳との関連を整理し、つながりが視覚化できるよう表にまとめた。来年度に向けて次の担任への引き継ぎや、新しい担任の実践にこれらの表を活用し、本年度の取組が来年度もスムーズに行えるようにしていく。また来年度の取組をもとに、さらにこれらの表を修正しながらより教育効果の上げられるものにしていく。 来年度も活動することが目的ではなく、活動を通して児童にどのような力を育てたいのか明確にし、指導者も児童も同じ目的をもって学習できるようにする。その中で、郷土のよさや人達に目を向かせ、郷土のよさに気付き、郷土愛を育てるような指導を行っていく。

【自己評価　評価】
Ａ：１００≦（目標達成）　　Ｂ：８０≦（ほぼ達成）＜１００
Ｃ：６０≦（もう少し）＜８０　　Ｄ：（できていない）＜６０

【外部評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。